

# 緑丘



まりの絵  
Monaco  
'91 Ogata

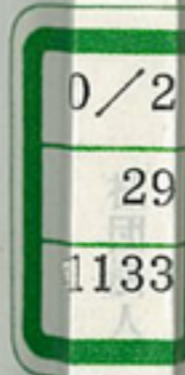
社団法人 緑丘会

緑丘 (第七一号)

平成四年二月二十六日

緑丘会東京事務所

〒170 東京都豊島区東池袋三ー一ーサンシャイン60 (57階)  
電話 〇三(三九八)ー一三三四〇



緑丘会

GODO  
ゴードーの焼酎

## 北海道の 大地が育みました。



北海道 大雪山



### 本格米焼酎「北彩」

道産米100%と  
大雪山系の良水から生まれた  
フルーティな香り、  
そしてマイルドな口当たり。  
この淡麗な旨さは  
北海道の新しい誇りです。

300ml20%330円 / 720ml20%700円 / 1,800ml20%1,230円 / 1,800ml25%1,360円 / 720ml25%770円 / 300ml25%350円

合同酒精株式会社 旭川工場製造 価格(希望小売価格)は参考価格で消費税を含みます。

代表取締役 野口正二郎(昭和10年卒) 常務取締役 栄坂 章(昭和23年卒) 常務取締役 石井 彰(昭和30年卒)

# 緑丘

- 緑丘会に期待すること ..... 2
- ビジネス最前線 ..... 11
- エバーグリーン講座 ..... 19
- 事務局だより ..... 21
- 随想・手記・短歌・俳句 ..... 29
  - 『近松門左衛門』 一浄瑠璃、歌舞伎狂言作者一 ..... 山口 文雄 ..... 29
  - 恩師を想う ..... 大原 孫七 ..... 33
  - すいもんさくらんぼ 一渡辺龍聖校長の面影を追って一 ..... 越崎 清二 ..... 34
  - 故松尾正路先生を偲ぶ ..... 鎌倉 啓三 ..... 39
  - 日米食生活の比較 一コメ中心の日本食一 ..... 林 利宗 ..... 44
  - 特攻隊戦死の緑丘生について全世界に放送 ..... 大庭 定男 ..... 48
  - 海外生活の思い出 ..... 櫻井 清治 ..... 50
  - 文房四宝(四)完 ..... 松橋 玄光 ..... 56
  - 中国遼寧省をたずねて ..... 大河平元久 ..... 60
  - 第三回大北辰会(北斗寮OB会)賑やかに緑丘会館で ..... 64
  - 平成三年を送り新年を迎えて ..... 堀池 善弥 ..... 66
  - 母校開学八十周年記念にちなみ ..... 句苑緑丘会 ..... 67
  - 句苑緑丘 [21] ..... 68
  - 尾形圭介氏 作品展盛況裡に終る ..... 70
  - 平山幹昌氏(昭和28年卒)画集頒布会 ..... 71
- 追 悼 ..... 78
  - 物故会員 ..... 101
- 緑丘往来 ..... 102
- 学園だより ..... 106
- 支部だより ..... 112
- 同期会だより ..... 116
- 緑の紙風船 ..... 149
  - 会館利用日誌 ..... 155
  - 会員異動通知 ..... 158
  - 編集後記 ..... 171

表紙画 尾形圭介(昭和34卒)

おたる  
望洋  
パークタウン

## 三菱地所の家

- 販売価格/3,310万円(1棟)~4,976万円(1棟)
- 最多価格帯/3,300万円台(6棟)※消費税含む
- 全棟住宅金融公庫融資(優良分譲)付



「おたるよるむ」をばぐくむ街。

お問い合わせ・お申し込みは

現地販売センター ☎(0134)54-8843  
午前10時~午後5時 千047-01 小樽市望洋台2丁目23番36号

三菱地所  
売主 (更新中) 建設大臣免許7第857号 (社)不動産協会会員 (社)日本高層住宅協会会員  
 札幌支店: 千060 札幌市中央区北2条西4丁目(北海道ビル9階) ☎011(221)0162

小樽都市開発公社  
売主 北海道知事免許 後志(5)第150号  
 千047-01 小樽市望洋台1丁目8番1号(Wing2階) ☎(0134)54-1311

三菱地所住宅販売  
販売代理 建設大臣免許7第1512号 (社)不動産協会会員 (社)日本高層住宅協会会員  
 札幌支店小樽営業所: 千047 小樽市稲穂3丁目7番4号 (朝日生命小樽ビル6階) ☎(0134)22-5900

小樽市の南東部。海を望む丘の上の、  
〈おたる望洋パークタウン〉。



一、近代劇と世界思潮 宮森麻太郎

就中、戦後デモクラシーの喧しき折柄、吉野博士の講義は人気があった。博士は真黒の頭髪を中央から分け顔色はあお白くチヨビ髭をはやし、紋付羽織に袴という出でたち、稍神経質らしい端然たる紳士であった。当時雑誌改造などに論陣を張り、いつも特高に尾行されているという評判だった。小山内先生の歌舞伎の話も好評だったが、先生はいつまでも歌舞伎のマンネリズムにあきたらず、築地小劇場の新劇運動の構想も既に持つておられたのではあるまいか。有島さんのホイットマンも、自由人有島さんの面目を遺憾なく發揮され、面白かった。しかし同じ四年後、同じ軽井沢であのように自殺されようとは、運命の神以外に知る者はなかった。弟の画家生馬さんの東西芸術比較論なども、仲々興味深く聴講者に人氣があった。

講義もさることながら、寄宿舎生活が退社、小樽商業新報と提携した新小樽に入社した。新小樽が不振で、函館毎日新聞に移り主筆になったが、大正十年十一月二十三日、病死した。小樽では、私の家とも近かったので、お近づきを願っていたが、温厚な紳士だった。社会主義シ

# 故松尾正路先生を偲ぶ

地獄坂をのぼって小樽高商の門をくぐったのは昭和十二年四月であった。中学校とは違って選択科目としての第二外国語が第二学期から課せられるので何国語を選ぶかに直面、「ふらんすへ行きたしと思へどもふらんすはあまりに遠し」の朔太郎の詩を思い浮かべながら、私は迷うことなくフランス語を選び、大学書林の「フランス語四週間」を買って勉強し出した。九月、二学期が始まりフランス語の時間、本来なら一年生は日本人の教師が担当し、二年生になってからフランス人と日本人教師が受持つことになっていたが、松尾教授がパリに留学中のため、最初からマダム・マチルド・オオグ

亦楽しかった。小学校が我々に当てられたが、三食寝具付其の他で、一日一円也とあるから、一寸気の遠くなるような話だ。地元はもとより遠い方では北海道の私、広島辺からも集まっていた。間にはさまった日曜が一日休みだった。丁度、その折、軽井沢別荘に避暑中の衆議院長島田三郎先生が、夏期大学生有志に会いしてもよいという、内報があった。有志を募り集まった数人が、天下の政治家島田三郎先生との会見で、大いに張切って訪問した。先生は安楽椅子にかけられ、世界及び日本の世相を、立て板に水を流す如く滔々と語られた。正にシマダシャベローとはよく云ったものだと、一同呆気にとられ感心した。しかし時の衆議院議長が、何処の誰ともわからぬ書生を相手にして、天下国家を談ずるその庶民性、大衆性には、頭の下がる思いがした。寄宿舎では、毎夜、夕食後に、各自が郷里の持寄り話に花が咲いて、面白かった。特に印象に残っているのは、軽井沢の元警察署長さんの、軽井沢外人宣

口が教壇にたれた。松尾先生が教室に出られたのは昭和十三年四月からであった。小柄なやせ型の体躯、ちぢれた髪を無造作にかきあげながらむしる控え目なシャイな口調で授業を始めた。その時から既に五十四年がたっている。平成三年三月二十六日の夜、突然の電話が思いがけない先生の訃報を伝えた。昨年六月、我々の卒業生五十周年の記念大会が小樽で開かれ、その機会に真駒内のお宅を訪れお目にかかったのが最後となった。奥様と散歩の途中、ステッキを落とし、それを拾おうとして転んで怪我をされたとか、額に絆創膏をはっておられたのに驚いたが、しかしとてもお元氣の

教師殺人事件の、苦心の談であった。この元署長さんも、聴講生で我々グループの一人。現職時代の思い出話だが、軽井沢の別荘に避暑に来ていた外人宣教師が殺害され、犯人らしき人物が履き捨てていった雪駄の裏の分析から、ラードと判定、各ホテルのコックを洗って、遂に犯人逮捕に至る頗るスリルにとんだ筋で大喝采を博した。私には、

「君は北海道から来たのだから追分を唄え」と攻められたが、おいわけのおの字も唄えず降参した。

此の講習は、私の青年時代の人生にとって好奇心をひき起してくれた。帰樽後、私は小樽新聞から別れた加藤眠柳さんの「新小樽」に、「夏期大学の追憶」なる一文を草し、掲載してもらった。眠柳さんの養子良蔵君は、大阪出身で私とは高商同期であった。眠柳こと加藤米司は東京で新聞記者をしていたが、堺利彦とも交遊があり、明治三十九年帰樽、四十一年、小樽新聞に入社、健筆を振り、社会部長にまでなった人だが、樽新の内紛で

鎌倉 啓三  
(昭15年卒)

(未完)

象と影響を与え大きな足跡を緑丘に残された。あの柔らかな風貌と独特の語り口はフランス語の学生は勿論、すべての学生に「マツつあん」の名のもとに親しまれ忘れ得ぬ先生であった。

私は三年間ひたすらフランス語に親しみ、御迷惑もかえりみず、先生のお宅にも絶えずお邪魔し、三年生になってからゼミナールは唯一人先生の御指導を仰いだ。またフランス語教室の連中と語りつて「フランス語会」をつくり下級生にも呼びかけて度々集会を開いた。私の緑丘生活は松尾先生とフランス語を除いては語れない。

昭和十六年初夏の頃、私は神戸の山下汽船に勤めていたが、先生は就職指導教授として阪神方面に出張され、我が社も訪問された。その夜は汽船会社に勤める数名の先輩達と先生を囲んで神戸の夜を楽しみ、そのあと無理にお願いして私の下宿に泊まっていた。六甲山の麓、梅林で知られた岡本にその家があり、谷

崎潤一郎の小説「細雪」の舞台になった一郭であった。翌朝僅かの時間をさいて、先生を御案内し静かな屋敷町を散歩した一ときを今でも鮮かに想い出す。

また私は戦後約十年、小樽に暮らしたので、学生時代にもどったような気持ちで先生をよくお訪ねした。昭和十四年鉄道省などの招待でパリから来日したコンラッド・メイリとキク・ヤマタという夫妻は、戦時中鎌倉に住み、特高の迫害もうけたが画家であったメイリは俳句を学び始め高濱虚子の門をたいた。昭和二十四年夫妻はパリにもどったが、私はその頃俳誌「ホトトギス」でメイリのことを知り彼と文通を始めた。「ホトトギス」に発表された彼の俳句や自分の句を五・七・五のフランス語に訳してしきりに彼と便りを交はした。その度に先生にフランス語を見ていただいた。

一八八三年フランス文化とフランス語普及を目的として創設されたアリアンヌ・フランセーズという世界的な組織がある。戦後松尾先生が中心となって小樽

した。松尾先生の次兄に邦之助さんという、当時読売新聞・副主筆の方がおられた。大正十二年東京外語仏語部を卒業後すぐにパリに渡り、やがて読売新聞の特派員、支局長となり、第一次大戦終了後帰国する途ざつとパリに在って大いに活躍され「クニ・マツオ」の名は「パリの民間人文化大使」とも称されて有名であった。丁度その頃邦之助さんが北海道に講演旅行にいられていたの、北海道ホテルの発会式に出席して頂き記念講演をお願いした。その後私が東京に出てからも引続き晩年まで知遇をいただいたことも忘れられない。

数年前、第二の職場からもそろそろ引退して四十何年かのサラリーマン生活に終止符をうとうとする頃、思いあってNHKラジオとテレビで久しぶりにフランス語の勉強を始めた。半世紀も前の松尾先生やオオグロ・マチルド先生を思い浮かべながら六十の手習いであった。そんなある日、NHKは視聴者参加番組として三十分間の番組出演者を募集した。物

好きに応募したところ出演がきまった。男性は最年長の私と、パリ生れの小学校二年生の二人。女性は大学生、OLと主婦の計五人で三十分の会話番組、放映時間がきまってから松尾先生におしらせした。録画取りは二度リハーサルがあつて本番、終るとすぐモニターに写し出された。それを見ながら学生時代の方がもつとうまかつたような気がしていた。やがて教育テレビで全国に放映され、まもなく先生から「五十年前のフランス語の学生がテレビに出演するとは全く思いもよらぬ出来事でした。家内もわからないまま一心に見ていました」とのお便りが届いた。

思い出は更にさかのぼる。昭和十四年十二月雪のニセコアンヌプリの頂上の出来事。毎年十二月には山スキーの同好者が集まってニセコ合宿が行われていたが、十五年三月神戸に転職がきまっていた私は北海道での山スキーの仕納めかとこれに参加した。一年生から三年生まで総勢二十名位はおったか、それに南亮三

にもこれを造ろうと、当時北洋相互銀行頭取寿原九郎さん（大正十三年卒）を会長に推して、この会を結成するお手伝を

昭和十四年（一九三九）五月  
右から 鎌倉 令嬢 松尾先生  
校庭における園遊会



郎先生が長男の亮進さん―現一橋大学教授、当時は学令前―を伴い、また山スキーのお好きな松尾先生というのが一行の顔ぶれであった。東洋のサンモリッツともいわれるニセコアンヌプリ、チセヌプリ、イワオヌプリの山々の新雪にシユプールを描き、心ゆくばかり爽快なスキーツアーを楽しむ日々であった。宿舎は中腹の、電燈もないランプをともしたひなびた温泉宿、しかしお湯は四六時中、古びた木の湯槽に豊かに溢れつづけ、スキーに疲れた身体をいやすにはまことに快適であった。合宿最後の日はニセコの頂上をきわめ、昼食のあと、昆布温泉側へ一気に下ってゆく。私はこの時、いつも使っているのではなしに兄のカンダハのスキーを借りていった。昼食をすませてすつかり用意をし、いざすべり出そうとしたその瞬間、右のスキーがあつというまもあらばこそ、すると脚下から離れていくではないか。多くの人々は既に滑降を開始していた。山スキーを流したら大悲劇だと聞いていたし、積雪数メートル

ルのニセコの頂上、一瞬目の前が真つ暗になった。その時、斜め下を飛ぶように滑りおりてその一本のスキーを見事に拾いあげ、私の所にもつてきて下さった人が居た。その救世主は何と松尾先生であった。あの時先生の離れ業がなかったらどうなっていたかと思うと今でもぞっとするし、同時におかげで助かったと、深雪の山頂の一ときを有難く想い起すのである。

先生はまた文筆の人であった。吾々の学生時代、緑丘新聞に書かれた先生の文章は、流麗な筆致のエスプリに満ちた香り高いもので吾々を魅了した。

昭和二十三年九月、現代評論社から「プレヴォ・パラドル著近代思想の成立」の訳書を出版、本書は先生の御専門のフランスのモラリストの研究であった。

次に昭和四十四年十月、春秋社より「地球の春—詩と批評のあいだ—」が刊行された。その頃先生は四十年間の小樽での教壇生活を終えて札幌に移り住んでおら

れたが「時たま小樽へ出かけてゆっくり坂道をのぼってゆくと、この町の丘や海の空気はこんなに甘かったのかと樹々の緑の色もみずみずしく感じられます。—秋のしずかなある日、もう誰もいなくなった夕方の祝津海岸のベンチに一人腰をかけて、ながいあいだ立ちまわることが出来ずそこにいました。二十四才の青春時代から六十三才迄過ごしたこの港町の古い時間が夕べの波間に漂い潮の香となつて私の胸に苦しく迫って来ました—」と近況を記しておられる。この本には先生が凝っておられた植物のスケッチが随所に挿入されており我々を楽しませてくれる。

さらに昭和五十五年九月、たくみ書房から「思索と印象」が出る。このなかの多くのエッセーは、北海道新聞に掲載されたもので、先生はあとがきで「思索も印象もなにもかも、雪が青空の彼方へ消え去るように、肉体とともに姿を消すのがいちばんふさわしいと思っていたのですが、心の底にひそむ人魚の唄に誘われ

たのでせう—」と心境を語っておられる。私が二年生の頃、パリから学校に戻られた先生が「セルパン」という雑誌にある文章を発表されたのを思い出し、最近国会図書館で昭和十三年四月の「セルパン」を探し出した。題して「シベリアの通過日誌」という。

「僕のシベリア通過は日支事変の二ヶ月前だった。その後此処を経由する日本人は殆ど稀で或は自分達が最後に近いシベリア旅行者の一群だったかもしれない。周知の如く、シベリアを通過する外国人旅行者として許される行動の範囲は約九日間の列車生活と十時間にも足りないモスコオ見物だけである。僕の観たソヴェトは、しかし汽車の窓から眺めたソヴェト事情ではなくむしろ列車の中に寝食を共にした幾人かのソヴェト人に関する観察であり、これらソヴェト人こそ僕にとってソヴェトを窺う貴重な窓だったのである。何故ならソヴェトを通過するに際し僕の重大な課題は、新しき歴史を創めたというソヴェトの人間が彼等の

性格や心理生活の上に果してその新しき歴史を具現しているかどうかという疑問にかかっていた。僕の好奇心の対象は、彼等のイデオロギーやその政治経済的社 会面に向けられたのではなくソヴェト国家の構成員たる彼等が、人間性の裡に所 有しているソヴェト的現実(リアリティ)の方向にあった。即ちソヴェトのどんな統計表にも現れないものだけを観たかったのである。五月十四日午後五時半満 州里着から二十日モスコオに着く迄のシベリア横断鉄道の車中での見聞やソヴェト人との交流が綴られていて、五十四年前の青春の先生が観たソヴェト人の群像が興味深く描かれている。

近代、現代の名随筆をテーマ別に集大成した「日本の名随筆」全一〇〇巻が第一期から第十期に分けて作品社から発行されている。その第九十一冊「時」(三木卓編一九九〇年五月刊)に先生の「時 間の変身」が掲載されている。これは前述の「思索と印象」に初出のエッセーで、哲学的な密度の濃い思索が、詩的な先生

独特の香り高い表現で書かれた珠玉の文章である。この「時」に並んでいる作品は大佛次郎、吉田健一、福永武彦、岸田 国士、寺田寅彦、鈴木大拙等々の日本を 代表する超一流の文化人である。執筆者 紹介で「四〇年間にわたって小樽商科大 学でフランス文学を講じ、心に沁みるエッセーの書き手でもある」と先生のプロフィールを描いている。

富美未亡人からの最近のお便りにはこうしるされていた。  
「—病院から退院して以来この二、三年はいつもニコニコとした表情で穏かに 過し、自分の人生は自分の仕度いことを しながらほんの小さな世界であったけれど ども悔ゆる事なく幸せであったと常に感謝しておりました。最後迄意識ははっきりとしておりましたのに、其の穏かな面 もちのまま老人性肺炎のため満八十六才 で静かにこの世から去って行きました—」と。

一八〇八年にフランスで制定されたパ ルム・アカデミック章(Palmes

Academiques)という、教育・科学・芸術の部門を対象にした勲章がある。昭和四十五年三月先生の長年にわたるフランス語教育の功績によりフランス政府よりパ ルム・アカデミック・シュヴァリエ章が、更に五十三年三月には同オフィシエ 章が贈られた。又五十年十一月には勲三等旭日中綬賞を受けられた。  
先生の御生涯を通じて日仏文化交流につくされた貢献は、このように日仏両国 から顕彰され、その功績は先生の温顔と共に先生の教えを受けた吾々の胸にいつまでも生き続けることを信じて疑はない。(完)

